



齲蝕の“削らない治療”を担う 歯科衛生士に贈る、エールの書

月刊「デンタルハイジーン」別冊
齲蝕の“削らない治療”を担う歯科衛生士のための
カルイエスコントロール 5つのレシピ
伊藤直人 著

AB 判/136 頁/定価 3,960 円 (本体 3,600 円 + 税 10%) / 医歯薬出版 (2025 年 5 月)

非ペリオハラスメント？

この書評の執筆段階で本別冊はベストセラーになっている。これはかなりマズイ、いやたいへん遺憾である。書評が出た後にベストセラーになってもらわないと「先生の書評のおかげでベストセラーになりました」と言ってもらえないではないか。まあ、そもそも書評の一つくらいで売り上げに影響が出るなんてはなから思っていないが、それでも書評が出た後に売れゆきが悪くなると「へっへ〜」という気持ちくらいにはなる。

本別冊は、そんなささやかな書評執筆者の喜びを奪う稀有な書である。しかも、なぜかいつも私への書評依頼はペリオではない本ばかり。本別冊も生粋のカリオロジーの本だ。これは“非ペリオハラスメント”ではないかと、最近薄々感じている。なんで？

ペリオとカルイエスの共通項

本別冊を読んで、精神科医の中井久夫氏が生前おっしゃっていたことを思い出した。「統合失調症は治らない病気ではなく、治るのを邪魔する要因の多い病気である」。これはそのまま

カルイエスにも当てはまるような気がする。唾液や飲食物、フッ化物、セルフケアといった、いくつかのダイアルがあって、その各ダイアルの回し方一つでトータルの状況が変わってしまう。本別冊はそのダイアルを「5つのレシピ」として具体的に提示し、著者の医院で実践しているノウハウまで公開した“男前”な本である(ちなみに著者の phenotype も男前！)。

本別冊では歯周治療をたとえに使っていて、“削らない治療”は“非外科療法”、“削る治療”は“外科治療”に相当するとのこと。一瞬、「まさかの領空侵犯？」とも思ったが、まさにそのとおりである。歯周治療では非外科治療がベースで、たまに外科治療に寄り道してまた非外科治療に戻ってくる。寄り道するのは非外科治療では対処できないとき(歯肉縁下齲蝕や角化歯肉が不足している場合など)や、外科治療を行うことでその後の非外科治療がより有効になるとき(深い歯周ポケットや根分岐部病変があるときなど)である。あくまで非外科治療が基本。カルイエスでも“削らない治療”がベースで、たまに“削る治療”に寄り道して“削らない治療”に戻る。

カリエスコントロールに重要な5つの要素を、ビジュアルにわかりやすく解説！
本号の特集（p.1260～）と合わせてお読みください



土台としての“削らない治療”

私の医院では、インプラント治療を前面に出していないし、ましてや私の満面の笑顔を貼りつけた大きな看板も出していない。でも、「歯が抜けたのでインプラントをしてほしい」という患者さんがたまにお見えになる。

歯が抜けまいと頑張る努力に興味のない患者さんであれば、「やめときなはれ」とやんわり(?)お断りする。予後が悪いことは埋入前からわかるからである。それに対して、過去のトラブルがきっかけで口腔ケアに目覚め、歯を失わないための努力を続けている患者さんが、不幸にも歯を失うことがある。そんな場合に埋入したインプラントの予後はきわめてよい。

そう、治療のお世話にならないよう努力している人は、治療をしても予後がいいのだ。これは“削る治療”にならない努力をしている人は、“削る治療”をしても予後がよいことと同義で、それこそが本別冊に通底している“削らない治

療”の本質なのである。

“削らない治療”を担うのは歯科衛生士！

“削る治療”や外科治療は歯科医師が担当し、“削らない治療”や非外科治療は歯科衛生士が担当する。非切削や非切開が歯科治療のベースであり、本別冊ではそれを担う歯科衛生士たちへのエールがあちらこちらに散りばめられている。

歯科医師のお世話にならないよう努力することが口腔ケアの基本。長年メンテナンスしてきて久しぶりの治療になったとき、「いややわ〜。先生の世話になるのは緊張するわ〜」と患者さんがおっしゃるのは、きつといままでのやり方が間違っていなかった証なのだろう。

非切削・非切開が主題の本なので、非ペリオハラスメントには目をつぶりたい。「本別冊は超おススメ！」と言ってもみんな買った後だと“ちょっと”寂しいが……。